

【エッセイ部門・大谷文芸賞】

「声」

私立松蔭高等学校 第2学年 中村樹里

いつからだったのか、今の私には思い出せない。ある時から、私の心に大きな空白が生まれた。いや、もはや「空白」という言葉では表しきれない。もっと深くて苦しいもの。きっと誰にも分かりはしない。私を襲った、底の見えない暗闇へと引き摺り込ませ、徐々にだが確実に心を蝕んでいったあの感覚を。

そして、私はいつの間にか心から笑う事が出来なくなってしまっていた。きっと、その原因は、最初は些細な事だったのだと思う。だが、それが少しずつ募っていき、とうとう自分の中で何かが壊れた。そんな日々がどれ程辛かったか。自分で言うのも何だが、その時の私は辛いという事を自覚していた。まるで悲劇のヒロインにでもなったかの様に苦しみに溺れて。今考えれば馬鹿だった。

よく世間では、辛い事があっても前を向けと言う。そうすればいつか乗り越えられる、報われるからと。しかし、そんな言葉は私にとって無意味でしかなかった。前を向こうとなど少しも思いもせず、ただの綺麗事だと嘲笑い、いつまでも苦しみに留まり続けた。

そして、私は日々、自分自身を責める様になった。今思い返せば、無意識に自分を自ら犠牲にしてしまっていたのかもしれない。

そしてここからが本題である。

ある日、私は、とあるラジオ番組を聴き始める。一人でパーソナリティーを務めるラジオ番組だ。それは毎週三十分放送されるもので、その時間が私の唯一の楽しみになった。

そのラジオパーソナリティーはテレビでも活躍されている人で、私は顔も知っていた。ただ、テレビには様々な人が出演する。中々一人で長々と話す事はない。だが、ラジオは違う。その方一人で進行し、話さなければならない。そして私はラジオでのその方を知った時、その方の印象が一気に変わったのだ。

ラジオというのは難しい。その人の顔、表情が見えない。言葉だけで全てを伝える。それは簡単に人々の耳には響かない。出来る人は中々居ないだろう。

その方は、自分の軸をちゃんと持つ人だった。言葉選びも上手く、自分の思いをきちんと伝えられ、聴いていて心地良かった。そのラジオ番組にはリスナーからの相談を受け付けるコーナーがあった。その方が実際にリスナーの相談に乗り、語るのだ。

私はそんなコーナーがあると初めて知った時、驚いた。何処の誰かも分からない赤の他人の相談に乗るのだ。軽率な言動など勿論許されず、責任も取れない。そもそも人の相談に乗る事は難しい。その人自身が抱えている事を、信用してくれているからこそ話してくれている。それは有り難い事だが、いざ相談されると何を言えば良いのか分からない。だから、私は人の相談に乗る事が苦手だった。

しかし、その方は違った。赤の他人からの相談でも一つ一つ丁寧に言葉を紡ぎ、どうすればその人が少しでも楽に考えられるかどうかをその方自身の言葉で語った。誰も傷つかない優しい言葉で。そして、その方はいつもそのコーナーの終わりに言う。

「今言った事が正解ではない。一つの考えとして聞いて欲しい。そんな考えもあるんだという事を。ただ少しでも楽に、抱え込まずに居られたらいいな」と。その言葉に私は、そのメールの送り主でもないのに救われた。そう、何事にも「正解」などない。ただ寄り添ってくれるだけで十分なのだ。気持ちが楽になれる。その事に私は初めて気が付いた。

そしてその方の素晴らしい所は、どんな相談に対しても簡単に流そうとせず、真剣に向き合っていた所だ。その事に私は感動し、その方を尊敬した。

それからというもの、私は少しずつだが前を向く事が出来た。辛い事があっても、自分自身でどうすれば乗り越えられるかどうかと頭を働かせられる様になった。そしてその方の素晴らしい言葉選びに憧れ、苦手だった作文に取り組み、なんと有り難い事に二度程学校内で表彰された。人からの相談も、話を最後まで聞き、その人自身を否定せず、少しでも力に、楽になれたらと思い、受ける様になった。すると、周りからは「話すとなれる」「真剣に聞いてくれるから有り難い」と言って貰える様になった。そして私の中に出来ていた大きな空白、苦しみはいつの間にか消え、笑顔も増えていた。また、自分自身を成長させ、変わる事が出来た。そして、何より人は言葉や「声」だけで誰かの心を大きく動かせる事が出来るという事を知った。

あれから数年経つが、今でも私はそのラジオ番組を聴いている。その方はきっと、いつまでも私の憧れであり続けるだろう。私に出来た空白を埋めてくれた恩人。きっとこの経験はこれからの私の人生に大きく影響すると思う。そして私は一つ挑戦してみようと思う事がある。そのラジオ番組にメールを送る事だ。その方は読んでくれるだろうか、そうわくわくしながらペンを取ってみる事にする。